

# ひとりだち

きこえとことばの  
支援センターだより  
R8年2月号



みみの助

## 「40年前の岐阜聾学校を振り返る」

岐阜県立岐阜聾学校は、1931年の創立以来、今年度で94年目を迎え、歴史と伝統のある、岐阜県で唯一の聴覚障がいのある子どもたちを対象とした学校で、当校は早くから幼稚部・小学部・中学部・高等部に専攻科を備えた一貫教育体制を築き、40年前も現在と同じように幅広い年齢の子どもたちが共に学ぶ環境が整っていました。今回の「ひとりだち」では、その当時の教育の在り方や学校の様子をお伝えしたいと思います。

### ◇当時の教育の中心 — 聴覚口話法

今から40年前、1980年代の日本では「障がいのある子どももできるだけ一般社会で生活できるように」という考え方が強く、障がい児教育全体が“社会への適応”を重視する傾向にありました。聴覚障がい教育においても、手話はまだ社会的な理解が十分ではなく、手話が一つの言語であるということが広く認知される前の時代でした。

そのため、一般の社会生活で必要とされる音声言語を身に付けることが重要とされ、一般的に普及していない手話ではなく、音声によるコミュニケーションを中心とした「聴覚口話法」が主流でした。学校では基本的に手話を使うことが禁止され、補聴器や訓練機器を使って聞こえの力をできる限り生かし、口形や表情を読み取る「読話」、そして発音練習が重視されていました。

当時の授業では、聞こえの手がかりを最大限に活用しながら、音声でコミュニケーションを身に付けることが大切にされていました。現在のように手話が積極的に取り入れられる時代ではなく、むしろ音声習得の妨げになると考えられていたため、使用の機会は限られていました。

### ◇養護・訓練（発達支援・聴能訓練・生活指導）

養護・訓練とは、現在の「自立活動」（発達支援や生活支援など）に当たるもので、学校生活全体を支える重要な柱でした。

当時は、乳幼児期からの早期教育が重視され始めた時期で、補聴器の普及が急速に進み、幼稚部や小学部では発音・発語指導が盛んに行われていました。少しでもきれいな発音・発語ができるよう、口の形や舌の動き、息の出し方など、鏡、ウエハース、卵ボーロ、ストロー、風車など身近な教材を使って練習していました。口や舌の筋肉は使わないと固くなるため、こうした訓練はとても効果的でした。

その当時の様子は聾教育資料室（会議室南側）にも展示されていますので、お時間の  
ある時にぜひご覧ください。

中学部・高等部では、社会で自立して生活する力を身に  
付ける教育が重視され、作業学習や実習を通して、卒業  
後の働く力を養う指導が行われていました。特に高等  
部には産業工芸科、被服科、理容科が設置され、専門的  
な知識や技術を身に付ける学習が盛んでした。家具製作や  
ファッションショー、理容科での国家試験に向けた実習  
など、実社会につながる教育に力が注がれていました。



創立70周年記念誌より

### ◇運動会・部活動

当時は幼児・児童・生徒の数が100名を超えており、スポーツ活動も非常に盛んで  
した。運動会では、幼稚部から高等部までが一緒になり、様々な競技に取り組みまし  
た。応援合戦にも大変熱が入り、活気に満ちた学校行事でした。

また、現在では安全面の観点から実施する学校が少なくなった組体操も行われ、男子



創立70周年記念誌より

生徒が4段の塔を完成させたり、音楽に合わせ華麗な  
衣装を身にまとった女子生徒がダンスを披露したり  
していました。

部活動も活発で、陸上部、卓球部、バレーボール部  
は土日も使って練習に取り組みました。他校高校生  
との合同練習もあり、確かな実力をつけ、東海大会  
や全国大会などで多くの生徒やチームが輝かしい成  
績をおさめました。



\* 聞こえの田中（旧ナショナル補聴器センター） 3月 4日

\* 理研産業 3月18日

場所：本館1階 補聴相談室

時間：13時30分～相談が終わり次第終了

\* イヤモード作成、補聴器の不具合等の相談は、業者来校日の前に、担任を通じて補聴  
相談係への連絡後、申込用紙の提出が必要です。